

健康で明るい家庭づくりを

青少年の健全な育成をはかるうえで、家庭の果たす役割は非常に大きいものです。

県では、毎月第一日曜日を「家庭の日」として健康で明るい家庭づくりを提唱し、その普及と啓発に努めています。その運動の一つとして、「家庭の日」の作文募集を行い、七百八十二点の応募がありました。ここに作品の一部を紹介します。

かていのひのおんがくかい

三加和町立緑小学校 一年 たけした のりこ

ゆうごはんがすんでから、にいちゃん
が、
「おんがくかいばしよう。」
といました。わたしは、
「うんしよう。そんならふえとかはーも
にかばもってくるね。」
といてにかいからもってきました。
おとうさんがはーもにかで、にいちゃん
がふえで、おかあさんがたんぶりで、
わたしがおるがんです。
みんながしているきらきらぼしを、
やることになりました。おかあさんが、
「二、三の三はい。」
といたので、わたしはおるがんを、
「どそそらそ」
とひきました。
でも、ちょうしがあいません。にいち
やんがあとから、
「どそそ」
となったり、わたしがひっかかったの
で、やかましくなりました。
きよくがおわったら、
「いっちゃんあわんだったね。もう一か
いしてみるばい。」

とおとうさんがいきました。
わたしは、ひっかからないようにほん
をよくみてひきました。

こんどはよくあって、いいちょうしで
す。おとうさんはまるで、おんがくかい
の人のように、からだをゆらして、あた
まをふるえさせてふいています。

おかあさんは、たんぶりをたたきな
がらしゅのように、口を大きくあけて
うたっています。

にいちゃんは、かおをあかくしてふえ
の音を大きくふいています。
わたしは、あんまりいいちょうしなの
で、みんなをみたらまちがえました。

もう一かいやりました。わたしが、お
かあさんのように、うたってしたらうま
くできました。

ばあちゃんが、ひとりみているので、
わたしはばあちゃんに、
「たんぶりをたたきなせ。」
といました。ばあちゃんが、
「きらんけんよかばい。あんたたちで

しなっせ。」
となかなかにぎろうとしません。

それで、わたしはいばってまた、おな
じことをいきました。ばあちゃんはいし
たなく、
「じゃあ、やってみるばい。」
といたのでわたしは、

「たんたんたん。」
とおしえてやりました。ばあちゃんも、
いっしょうけんめいです。

「じようずたい、ばあちゃん。」
といたらばあちゃんは、にこにこして
はりきってきました。みんなであわせる
ことになりました。

「ようい。一、二の三はい。」
とおかあさんがいって、いよいよおんが
くかいがはじまりました。

「どそそらそ。」
とおかあさんがうたいます。どんどんち
ようしがでてきて、いきぶんになりま
した。

励まし合う家族

益城町立益城中学校 二年 小田 淑恵

私の家には四人の家族がいる。私にと
ってなくてはならない四人だ。父、母、
姉、私。
今思えば私達家族は、数々のけんかを
してきた。ちょっとしたこと、ひど
いけんかになり、暴力さえふるうよう
にまで発展することもあった。親子げん
か、夫婦げんか、兄弟げんか——そんな
けんかが積み重なっていつしか暗いふん
囲気をつくることもしばしばあった。

また、たくさんの悩みもあった。家の
新築に要した借金の返済や姉の受験、父
の入院；そして現在に至っている私達の
家庭。

私にとって現在の家庭は、実に大切な
ものである。いろいろな悩みも、ちょっ
とした問題がひき起こしたトラブルも、
四人で話し合い、解決して乗り越えてき
た。父母のけんかに明け暮れる日々も、
姉の受験にイライラしていた日々も、中
には、家族が断絶してしまいうるになっ
た悩みも、少なくはなかった。

けれど、私達は歩き続けた。四人であ
ったからこそ歩いてこられた。悩みはか
かえているものの、私にしてみれば、今

が一番安心して暮らせる毎日である。ク
ラブから帰り、疲れた私をいやしてくれ
る場所であるし、お互い目標に向って励
ましあえる場所でもある。
私が、「家庭」のありがたさを感じ
みと感じたのは、ついこの間のことであ
る。
親しくしていた友人からつきはなさ
れ、一人ぼっちになった私は学校も楽し
くなくなり、一人でずいぶん悩んでいた
が、毎日がいやでいやで、さびしくてな
らなかつた。学校にも、クラブにも行く
気がしないし、何をしても心にしこりが
残ってはれれしなかつた。悩みをうち
あけられる他の友人もいなかった私は、
ある夜ついに父と母に話してしまつた。
その時、父母がいつてくれた言葉。今で
もこの耳に、はつきりと焼きついでい
る。

「離れていく友人は、離れていかせるが
いいさ。そのうち、きつといい友人が
みつかる。おまえはまず、友達づくり
に努める事だね。ただし、一つだけは
言っておく。おまえは決して一人ぼっ
ちなんかじゃないぞ。」と。

「たった一人の親友が、友達が、あなた
から離れていったって、ここにお父さ
んがいるし、お母さんがいるじゃない
ね。お姉ちゃんだっているじゃない。
あなたには、自分自身の家族がいるの
よ。死ぬまで一人ぼっちなんかじゃな
い。もし、家族に不幸が起きたとした
ってどこかで誰かが見守ってくれてい
るからね。」
「よっちゃんがまちがっていなかったら
友達はずわわわわわわわわわわわわ
興奮して泣きじゃくって話す私の言葉
を黙って聞いていた両親は静かにこう言
った。心からのこの言葉を聞いた私は、
確かに、友人の裏切りに対する悔し涙
が、感激の涙へと変っていくのを感じ
た。そして同時にこう思った。

「私の悩みを聞いてくれる人がいる。私
を必要としてくれる人が、大切に思っ
てくれる人がいる。私は、決して一人
ぼっちなんかじゃない。だってこんな
に素晴らしい家族がいるんだもの。」
私はこの時初めて、家族のつながりを
感じたような気がした。

また、こんな事もあった。それは姉の
入試直前のことであった。父は日頃から
姉に「勉強しろ、勉強しろ」と強引だつ
たのに、姉の入試の前日、勉強部屋に入
ってきた父は、静かな口調でこう言っ
た。
「いよいよ明日は入試だけど、落ちて
も、うかつても、おまえ自身悔いのな

いように受けてこい。別に人生のせと
ぎわなんていうような、大げさなこと
じゃないよ。自分でできる限りの実力
を発揮すれば、それでいいんだ、ま
あ、思いきりがんばってこいよ。」
そばで泣きじゃくっていた姉が、寝る
前に私に向って、
「あしたは、一生懸命やってみる。」
自分を励ますように、不安をうちけす
ように堅い決意を眼に表しながら私に言
った。そして、この時私は父の本当の愛
情を、見たような気がした。

家族会議なんてわざわざ開いていな
い。しかし、四人は心をうち開け、問題
を出し合い、話し合うことにしている。
今、私の家は、たくさんの困難な問題
をかかえている。その問題を解決する、
一番根本的なものは、やはり家族を尊重
する気持ちと、思いやりだと言えるので
はないだろうか。そして、家庭というの
は、誰か一人の苦勞で成り立つものでは
ないと思う。もし、誰か一人に重荷がか
かっていたら、みんなでその重荷を分け
合い、協力して、それでやっと成り立つ
ものであると思う。だから、誰かが喜ぶ
ときには、みんな喜び、苦勞するとき
には、みんな苦勞できるのだと思う。
私ももうすぐ受験。この家族といっし
よなら、きつと乗り越えていけると信じ
ている。